

# 事態に対する話者の期待と感情・評価的意味 —理想化認知モデルの観点からの考察—

鈴木 智美

(2007. 10. 31 受)

【キーワード】 予測性、望ましさ、感情・評価的意味、理想化認知モデル、複合語「生-」

## 1 本稿の目的

本稿では、現代日本語の種々の形式に観察される感情・評価的意味の中から、事態の「予測性」および「望ましさ」との関わりを持つ意味に着目し、認知言語学における「理想化認知モデル」の観点から、事態に対する話者の期待<sup>1</sup>と、感情・評価的意味との関連について考察することを目的とする。

また、新たなケーススタディとして「生」（なま）を前項として持つ複合語「生-」を取り上げ、名詞による修飾の形をとる「生の-」との比較を行いながら、その意味の分析を行う<sup>2</sup>。

## 2 「予測性」および「望ましさ」に関わる感情・評価的意味

事態の「予測性」および「望ましさ」と関わりを持つ感情・評価的意味とは、例えば以下の例(1)～(4)に観察されるようなものである<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> 本稿では、事態への「期待」とは、事態の「望ましさ」および「予測性」から、複合的に生じる概念であるとする。端的に言えば、事態の「望ましい」あり方を「予測」することが「プラスの期待」につながり、事態の「望ましくない」あり方が「予測」されれば、「マイナスの期待」が生じると考えられる。

<sup>2</sup> ただし、「生-」が複合語の前項であるのか、あるいは形式的に意味を添える接頭辞であるのかについては連続的であり、明確な境界を示すのは難しい。本稿で取り上げる「生-」については、「接頭辞」として記されている辞書等もある。

<sup>3</sup> 事態への予測性や望ましさに関わる意味は、もちろん語彙的にも観察される。例えば「お湯がぬるい」「ビールがぬるい」と言う時の「ぬるい」は、対象の温度が話者の期待とは異なって、十分に熱くないか、または十分に冷たくなく、心地よくないものであることを表す。ただし、本稿では、このような個々の語について観察される意味ではなく、補助動詞や接辞など、何らかの生産的な形式を付加することによって生じる感情・評価的意味を対象として考察を行う。

- (1) 友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれてしまった。
- (2) ユビキタスだのアウトソーシングだの、新しいカタカナ語が増えてきている。
- (3) そんな立派な賞をもらえると思っていなかった。
- (4) あらためて私から解説めいた話をしなくていいでしょう。

例(1)は、結婚式場に入ってから、予告なくその日のスピーチを頼まれたという状況である。補助動詞「しまう」を用いることによって、予想外なことへの驚きや、戸惑いなどの意味が読みとれるようになっている<sup>4</sup>。

例(2)は、並立助詞「だの」が用いられた例である。「～だの～だの」は、話者が価値・意味を認めないか、あるいは心理的に距離があると感じている事態について、その顕著な例を並立的に列挙し、例示する働きをすると考えられる<sup>5</sup>。ここでは、あまり馴染みのないカタカナ語が増えてきている状況について、話者が戸惑いをおぼえているか、あるいはそのような状況を若干揶揄するかのような意味が読みとれる。

例(3)には、指示詞「そんな」が見られる。「そんな」を用いた場合は、話者にとって、事態が「想定外」あるいは「実現の可能性が低い」ものであることが特徴的に述べられることが多い<sup>6</sup>。ここでは、受賞を予期していなかったための驚きなどの意味が読みとれる。賞そのものの価値については、ここでは特に否定的なわけではない。

例(4)では、接辞「めく」が用いられている。「めく」が用いられる時、通常その行為・事態は、その状況において、“当然の成り行き”としては予測あるいは期待されていないものとなっている<sup>7</sup>。ここでは、話者は、話が「解説」の様相を帯びることをふさわしくないと考えており、それを自嘲的に述べるかのような意味合いが伴う。

いずれも、補助動詞、並立助詞、接辞など、何らかの生産的な形式を付加するこ

<sup>4</sup> 鈴木 (1998) にて補助動詞「しまう」の意味について分析を行った。

<sup>5</sup> 鈴木 (2004) にて並立助詞「～だの～だの」の意味と機能について分析を行った。

<sup>6</sup> 鈴木 (2006) にて、指示詞「そんな」を含む文に見られる感情・評価の意味について分析を行った。

<sup>7</sup> 例えば、「予告した通り、今日は重要なポイントについて {解説 / ?解説めいたこと} を行う」「経験に裏打ちされた、{自信 / ?自信めいたもの} は当然持つべきだ」のように、「解説」を行うことや「自信」を持つことの重要性や価値を話者が認識し、前もってそれを予告したり、当然持つべきととらえている時には、「めく」の使用は不自然となる。鈴木 (2007) にて、接辞「めく」の意味について分析を行った。

とによって、そこに「驚き」や「困惑」、あるいは「揶揄」や「自嘲」などの感情・評価の意味が伴うようになっている。

このような感情・評価の意味が、例(1)～(4)の下線を付した形式の使用から生まれていることは、次の(1')～(4')を見てみるとわかる。以下の(1')～(4')は、上記の例(1)～(4)の下線部分の形式を削除するか、あるいは別の形式に変えて述べたものである。いずれの場合も、上記のような感情・評価の意味は消え、中立的な表現に変わることがわかる。

- (1') 友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれた。
- (2') ユビキタスやアウトソーシングなど、新しいカタカナ語が増えてきている。
- (3') 立派な賞をもらえると思っていたいなかった。
- (4') あらためて私から解説をしなくていいでしょう。

### 3 「予測性」と「望ましさ」に関する話者のとらえ方

以上のような感情・評価の意味が伴う例を見てみると、その背後には、いずれも、ある共通の話者による事態のとらえ方があることが観察される。それは、以下の(5)a.あるいは(5)b.に示されるような、事態に対する話者のとらえ方である。

- (5) 話者は事態を「予測通り」の「望ましい」ものととらえているかどうか：
  - a. 話者は、事態を「予測通りではない」<sup>8</sup>、あるいは「予測の範囲外」<sup>9</sup>ととらえている。
  - b. 話者は、事態を「望ましいものではない」ととらえている。

ここには、2つの要因が関係している。一つは、事態の「予測性」であり、もう一つは事態の「望ましさ」である。話者が、事態を「予測通りではない」あるいは「予測の範囲外」ととらえている時、あるいは、話者が事態を「望ましいものでは

---

<sup>8</sup> 「予測通り」であるかどうかには、程度性・段階性が考えられる。したがって、「予測通りではない」ということには、「予測の反対」である場合だけでなく、「予測通りのレベルに達していない」という場合も含まれる。このような程度性が関わる例としては、第7節で複合語「生一」を取り上げ、分析する。

<sup>9</sup> 「予測の範囲外」というのは、そのような事態については、特に何も予測をしていなかったというものである。予測していたのと必ずしも“反対”の結果になったというわけではない。

ない」ととらえている時に、上記の例(1)～(4)で見たように、何らかの感情・評価の意味が伴うようになっているわけである。

仮に、事態が話者の「予測通り」のものであった場合には、例えば、以下の(6)～(8)のように表現することになる。

(6) 友人の結婚式場で、予想通りその日のスピーチを頼まれた。

(7) ユビキタスやアウトソーシングなど、新しいカタカナ語がやはり増えてきている。

(8) 立派な賞をもらえると、心の中で思っていた。

このように、「予想通り」「やはり」などの副詞表現を個別に挿入するか、「(そう)思っていた」などと述べることによって、表現することは可能であるが、補助動詞、並立助詞、接辞など、何らかの生産的・機能的な形式を付加することによって、事態が話者の予測通りであるということを示すのは難しい。

また、事態が「望ましい」ものであった場合も、以下の(9)～(11)のように、個別に「うれしい」「よかった」などの語句を加えて表現することになる<sup>10</sup>。

(9) 友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれて、うれしかった。

(10) ユビキタスやアウトソーシングなど、新しいカタカナ語が増えてきて、いいことだ。

(11) 立派な賞をもらえると思っていなかったが、もらえてよかった。

#### 4 「予測性」および「望ましさ」に関わる理想化認知モデル

以上、第2節および第3節で見えてきたことについては、言語事実の観察としては了解できても、今一步問いを進めれば、そこには以下のような疑問が生じてくる。

まず、事態は、なぜ、補助動詞、並立助詞、接辞などを付加することによって、

---

<sup>10</sup> 「審査員が私の作品を選んでくれた」など、補助動詞によって“恩恵”の授受を表すことは可能である。ただし、「恩恵の授受」と事態の「予測性」とは、特に互いに密接な関係にあるわけではない。一方、事態の「望ましさ」と「予測性」とは、「期待」という複合的な概念を生み出すなど、互いの関係が密接である。また、第2節の例(1)～(4)で見た形式などでは、「望ましさ」および「予測性」に関わる意味が、同時に、あるいはいずれとも分離しがたく観察されることがある。

話者の「予測通りでない」、あるいは「望ましくない」ものとして、描かれるのか。言い換えれば、「予測通りでない」、あるいは「望ましくない」事態が、なぜ何らかの生産的・機能的な形式を用いて、いわば“有標”の事態として述べられるのだろうか<sup>11</sup>。

また、事態が「望ましくない」ものである場合に、「残念だ」「好ましくないことだ」などの否定的な感情・評価の意味が伴うことについては、それは話者の“望まない”事態内容なのであるから、理解できることである。しかし、それだけでなく、事態が話者の「予測通りでない」時にも、なぜ、そこに「戸惑い」などの、何らかの“否定的”な感情・評価的な意味が生じることになるのだろうか。

以上の2つの問いに対する答えとして、本稿では以下の(12)のような理想化認知モデルを仮説として立てる。「理想化認知モデル」とは、我々が世界を意味づけ、言語によって表現する際の基盤となる、組織化された知識構造のモデルのことである<sup>12</sup>。

(12) 「予測性」および「望ましき」の観点から見た、事態のあり方に関する理想化認知モデル：

- a. 事態は、通常、話者の予測通りに進行・展開する。
- b. 事態は、望ましい内容のものであることが、好まれる。

(12)は、事態のあり方に関する我々の一般的なとらえ方を、仮説として示したものである。ここでは、2つの観点がポイントとなる。一つは、事態の「予測性」であり、一つは事態内容の「望ましき」である。我々は、通常、事態は「予測通り」に進行・展開するものと考えており、かつ、事態が「望ましい」内容のものであることを好むと考えられる。

人は、通常、無意識のうちにも、過去の経験の積み重ねの基盤の上に、周囲の状況を判断しながら、何らかの予測に基づいて行動している。その予測とは、過去の経験と現在の状況判断とに支えられた、それなりに根拠のある予測である。したがっ

---

<sup>11</sup> 例(6)－(8)あるいは(9)－(11)で見たように、事態が話者の「予測通り」、あるいは「望ましい」ものであった場合は、何らかの生産的・機能的な形式を付加することによってそれを表すわけではない。

<sup>12</sup> 「理想化認知モデル」(あるいは「理想認知モデル」)(Idealized Cognitive Model)とは、「我々がある社会・文化のなかで、対象を特徴づけたり、意味を概念化する際に利用する、ごく普通の平均的な状態を基に組織化された知識構造をモデル化したもの」である。(河上(1996:211))

て、想定外の要因などが介入しない限りは、その予測は、通常、現実のものとなると考えられる。

また、人は、生きている限りは幸福に生きたいと願うものではないかと考えられる。望ましくない事態が生じることは、通常好まれない。

これを、予測性および望ましさの観点から見た、事態のあり方に関する我々の一般的にとらえ方であると仮定すれば、この理想化認知モデルからはずれた事態は、平均的・一般的な事態ではないということになる。即ち、「予測通りでない」事態とは、この理想化認知モデルの観点から見て、一般的な“普通”の事態ではない。また、「望ましくない」内容の事態も、好まれる普通の事態とは言えない。

事態が一般的・平均的なものであるならば、それはいわば当たり前のことであるため、取り立ててその「予測性」や、内容の「望ましさ」について述べることは必要ない<sup>13</sup>。しかし、「予測性」や、「望ましさ」について、理想化認知モデルからはずれた特異な事態については、我々はそれを何らかの有標の形式によって表すことになると思われる<sup>14</sup>。

また、通常、事態は「予測通り」に進行・展開するものと考えられているのであれば、そうではない、心づもりと異なる事態について述べる際に、そこに「予測と違って、驚いた」「予想していないことなので、戸惑いを感じる」等の感情・評価的な意味が伴うことも納得のいくこととなる。

また、事態が「望ましい」内容のものであることを、我々が一般に「好ましい」ととらえていると仮定すれば、そうでない事態について述べる際に、やはり否定的な感情・評価の意味が伴うことも納得がいく。

## 5 理想化認知モデルの観点から見た事態のあり方の可能性

第4節の(12)に仮定した理想化認知モデルにしたがえば、事態には、以下の(13)に示すような a. ①～③、b. ①～③の、計6通りのあり方が想定されることになる。

事態の「予測性」に関しては、「予測通り」(a.)か、あるいは「予測通りでない」

---

<sup>13</sup> 事態が望ましさに関して特にどちらでもない、中立的なものである場合も、我々が、特にその点を取り立てて述べるということは通常ないと考えられる。したがって、事態の望ましさに関する(12)b.の理想化認知モデルは、中立的な場合も含めて、いわば、事態の内容は「望ましくないものでないならば、それでよい」というとらえ方と考えるのが、より適切かもしれない。

<sup>14</sup> 有標性とプロトタイプ効果との関係については、Lakoff (1987) が指摘している。

(b.) 場合に分類できる。「予測通りでない」ということには、「予測と反対」、「予測通りのレベルに達していない」、あるいは「予測の範囲外」ということが含まれる。

また、事態内容の「望ましさ」に関しては、「望ましい」「望ましくない」「望ましさにしてはどちらでもない」という3つの可能性(①-③)が想定できる。

(13) 事態のあり方の可能性：「予測性」および「望ましさ」の観点から

a. 事態が、話者の予測通りに進行・展開する。

その事態内容は…

①望ましい。
②望ましさにしては <u>どちらでもない</u> 。
③望ましくない。

b. 事態が、話者の予測通りではなく進行・展開する。

その事態内容は…

①望ましい。
②望ましさにしては <u>どちらでもない</u> 。
③望ましくない。

まず、事態の「予測性」に関しては、我々は、通常、事態が「予測通り」に進行・展開すると考える。したがって、そうでない場合、即ち事態が「予測と反対」であるか、「予測通りのレベルに達していない」か、あるいは「予測の範囲外」である場合には、それらは、いずれも理想化認知モデルからはずれた、平均的・一般的ではない事態となる。(13)のb.が、これにあたる。

また、事態の「望ましさ」に関しては、我々は、通常、事態が「望ましい」ものであることが好ましいと考える。したがって、上記のa.③およびb.③の場合は、いずれも「望ましくない」事態となっているため、それが予測通りであるか否かにかかわらず、理想化認知モデルからははずれる事態となる。

このように、「予測性」と「望ましさ」という2つの要因を組み合わせで考えた時、(13)に示した事態の可能性の中では、(12)の理想化認知モデルに合致しているのは、a.①およびa.②の場合のみである。この場合、事態は予測通りであり、「望ましさ」に関しては、望ましい内容か、あるいは望ましさにしてどちらでもない内容であり、少なくとも“望ましくない”ものとはなっていない。

一方、b.③は、「予測性」の点からも「望ましさ」の点からも、(12)の理想化認知

モデルからは、最もはずれたものとなる。事態は予測通りでなく、かつ望ましくもないものとなっている。

その他のものについて見ると、a. ③は、「予測性」から見れば、理想化認知モデルからはずれていないが、「望ましさ」の点において、はずれており、好ましくない事態となっている。b. ①と b. ②は、逆に「望ましさ」の点については、理想化認知モデルからはずれていないが、予測通りではないため、「予測性」の点においては理想化認知モデルからはずれている。いずれも、「予測性」あるいは「望ましさ」のいずれか一方の条件において、理想化認知モデルをはずれるものとなっている。

## 6 それぞれの事態を表す表現

以上、第5節の(13)で見た事態のあり方の可能性を、順に言語表現にあてはめて確認すると、以下ようになる。

まず、理想化認知モデルに合致する a. ①および a. ②の2つの場合は、例えば、以下のようなものである。

(14) 予想通り、(立派な) 賞をもらうことができた。

(a. ①あるいは a. ② : 「予測性」と「望ましさ」の点で、いずれも理想化認知モデルからはずれていない)

第2節で観察した「しまう」「そんな」「一だの一だの」などの形式は、このような理想化認知モデルに合致した文脈で用いるのは、いずれも適切ではない。

また、理想化認知モデルから最もはずれる b. ③の場合は、例えば以下の(15)(16)のようなものである。

(15) 友人の結婚式場で、予告なく、苦手なスピーチを頼まれてしまった。

(16) そんなひどい結果になるとは、想像もしていなかった。

(b. ③ : 「予測性」と「望ましさ」の双方の点で理想化認知モデルをはずれている)

また、理想化認知モデルから部分的にはずれる、その他の3つの場合は、以下のようなものである。

まず、以下の(17)(18)は、事態は予測通りであるが、「望ましさ」の点で理想化認



知モデルからはずれている場合である。

(17)友人の結婚式場で、案の定、苦手なスピーチを頼まれてしまった。

(18)ユビキタスだのアウトソーシングだの、意味のよくわからないカタカナ語が、やはり増えてきている。

(a. ③：「望ましさ」の点で理想化認知モデルをはずれている)

また、次の(19)(20)は、事態が予測通りのものではなく、「予測性」の観点から、理想化認知モデルをはずれるものである。一方、望ましさの点では特にどちらでもない。

(19)友人の結婚式場で、予告なく、スピーチを頼まれてしまった。

(20)まだ12月の初めなのに、町がもうクリスマスめいてきている。

(b. ②：「予測性」の点で理想化認知モデルをはずれている)

(19)では、「スピーチをする」という事態内容について、(20)では、「町がクリスマスの様相を帯びる」という事態内容について、話者はその「望ましさ」に関しては中立的である。

また、次の(21)～(23)は、事態内容は望ましいと考えられるものであるが、「予測性」の点で、理想化認知モデルをはずれている場合である。「予測性」と「望ましさ」の観点から見た時、(17)や(18)とは対照的なはずれ方となる<sup>15</sup>。

(21)友人の結婚式場で、思いがけず、素敵な人に会ってしまった。

(22)目の付けどころがすばらしいだの、文章構成力が優れているだの、自分でも考えてもいなかったようなほめ言葉が並んでいる。

(23)思いがけずそんなことまでしていただいて、感激です。

(b. ①：「予測性」の点で理想化認知モデルをはずれている)

---

<sup>15</sup> 「思った通り、負けてしまった」(予測通りだが、望ましくない)場合と、「思いがけず、勝ってしまった」(予測通りでないが、望ましい)場合では、理想化認知モデルからの逸脱の度合いに差があるのかどうかについては、考察の余地が残される。より強い感情・評価の意味を伴うという点からは、「予測性」よりは「望ましさ」に関して理想化認知モデルをはずれる場合の方が、より逸脱が決定的になるのではないかと思われるからである。

いずれも、第2節で観察した「しまう」「ーだのーだの」「そんな」などの形式は、このような、いずれかの点で理想化認知モデルと合致しない状況では、矛盾なく用いることができる。

## 7 事態が予測通りのレベルに達していない場合：複合語「生～」に見られる意味

ここでは、事態の「予測性」と「望ましさ」に関わる意味を表す形式として、「生」（なま）を前項として持つ複合語「生～」を取り上げ、名詞による修飾の形をとる「生の～」と比較しながら、その意味を分析する<sup>16</sup>。

事態の「予測性」に関しては、第4節(12)の理想化認知モデルにしたがえば、我々は、通常、事態は「予測通り」に進行・展開するものと考えている。この理想化認知モデルからはずれる「予測通りでない」という場合には、事態が「予測と反対」であるか、「予測通りのレベルに達していない」か、あるいは「予測の範囲外」の場合があると考えられる。

第2節で挙げた例においては、いずれも事態の予測性に関しては、その程度性・段階性が特に問題となる形式はなかった。そこで、本節では、事態が「予測通りのレベルに達していない」というように、程度性が関わってくる場合に着目して、分析してみる。

### 7.1 名詞句「生の」の意味：「非加工性・直接性」

名詞句「生の」は、まず、「加工していない・そのままの」という意味を表す。例えば、以下のような例の場合である。

(24) 生の魚／生の肉／生の卵／生の野菜

(25) 上級レベルの語学クラスでは、生の教材を使う。

例(24)は、いずれも、煮たり焼いたりなどの調理加工を施していない食材を表す。森田（1989:864）では、「過熱加工を施さぬ天然の状態」としている。例(25)の「生の教材」というのは、新聞記事などをそのまま教材として用いる場合のものを表す。語学教材用に特別に作成されたものや、あるいは書き換えなどの手を加えたもので

---

<sup>16</sup> 森田（1989:864-866）で、「生の」の分析がなされているが、名詞句「生の」と複合語の前項としての「生-」は、特に区別せずに扱われている。なお、森田は「生-」を「接頭語的働き」をするものとしている。

はないことを表す。

このような例の場合は、「生魚」「生肉」「生卵」「生野菜」「生教材」というように、「生」を前項とした複合名詞の形式に言い換えることができる。

また、「生の」は、以下のように「直接の」という意味を表す場合もある。森田(1989:865-866)では、「現実の姿そのまま」と記述されており、上記の例(25)に相当する「辞書に生の例文を載せる」なども、この意味に分類されている。

(26) 視聴者からの生の声

(27) カメラマンが撮った生の写真

(28) ライブハウスで生の演奏を聴く。

例(26)は、例えば電話やファックスなどにより、視聴者から直接に寄せられた意見のことを表す。誰かがまとめたり、言い換えたりしたものではない。(27)は、カメラマンが直接ファインダーをのぞき、撮影して、現像された写真のことを表す。雑誌やポスターなどの紙面を切り取ったりしたものではないことを表す。(28)は、ライブハウスで、今日の前で行われている演奏のことを表す。録音・録画などによる演奏ではないという意味である。

いずれも、二次的な編集を施されたものではないという意味では、上記の「加工していない」という意味と連続的である。

このような「直接の」という意味を表す場合には、「生ー」という複合名詞の形に言い換えることができる場合と、できない場合がある。(27)(28)をそれぞれ「生写真」「生演奏」と言うことは可能であるが、(26)をこの意味で「\*生声」ということではできない。

また、以上のような「加工していない」「直接の」という意味を表す「生の」は、いずれの場合も、特に感情・評価的な意味は伴わない<sup>17</sup>。

---

<sup>17</sup> 森田(1989:865)は、「加工していない」という意味での「生ー」は、「生野菜」「生しいたけ」のように「天然の姿そのままであるから新鮮でよい」というプラス評価を持つことが多いとしている。しかし、「生野菜ばかり食べていると体によくない」のようなプラス評価を伴わない表現も可能である。また、「生しいたけ」と「干しいたけ」は、その保存性や味・香り・風味、また調理の用途などがそもそも異なる食品のため、「新鮮さ」という観点からのプラス・マイナス評価が特に伴うものではないと思われる。

## 7.2 複合語「生～」の意味

一方、複合語の前項「生」には、名詞による修飾の形である「生の」には見られない意味も観察される。

### 7.2.1 「非加工性」

まず、「生～」にも、「生の」と同様、「加工していない」という意味を表す場合がある。この意味の複合名詞「生～」には、「生の～」と言い換えることが可能なものもある。

(29) 生魚／生肉／生卵／生野菜

(30) 上級レベルの語学クラスでは、生教材を使う。

例(29)(30)は、いずれも「加工していない・そのままの」という意味を表す<sup>18</sup>。これらは、7.1節で見た例(24)(25)のように、「生の」の形で言うことも可能である。

ただし、この意味の複合名詞「生～」が、すべて「生の～」と言い換えられるわけではない。例えば「生水」「生ビール」「生ハム」などは、それぞれ「沸騰」「加熱殺菌」「燻製」などの加工処理をしていないものであることを表すが、これを「?生水」「?生のビール」「?生のハム」などと言う言い方は慣習的になじまない。

### 7.2.2 「臨場性」

また、「生～」には、「今、{そこ／ここ}で行われている」という「臨場性」を表す意味も観察される。

(31) {生演奏／生放送}を聴く。

(32) 当予備校では、授業はすべて生講義です。

(31)の「生演奏」というのは、演奏が今、実際に行われているものであり、聞き手がその演奏に、今、現に接しているものであることを表す<sup>19</sup>。「生放送」というの

<sup>18</sup> 例(29)のような「加工していない」食材は「生もの」であり、それらの切れ端やくずなどは「生ごみ」となる。また、これらの「生もの」が腐ったような臭いが「生臭い」臭いである。

<sup>19</sup> 「ライブ」という外来語は「生演奏」のことを表すが、「生演奏を録音・録画したもの(＝「ライブ」の録音・録画)ではない」という「直接性」を特に表すために、「生のライブ」

も、録音・録画されたものではなく、今まさに現場で番組が進行中のものであることを表す。

ただし、「生放送」の場合には「放送」ということが既に間接性を含んでいることからわかるように、「臨場性」の中でも、焦点は「その“場”での直接性」よりも「同時性」の方にある。また、録音・録画などの処理を施されていないという意味では、いずれも7.2.1節の「加工していない」という意味とも連続的である。

また、(32)の「生講義」は、単に録音・録画ではないという意味のみならず、いわゆる遠隔授業・衛星通信による授業のように、講師が別の場所において、画面を通して行うようなものではないという意味も含む。今実際に目の前に講師がいて、行われる講義であることを表し、「今・ここ」での「臨場性」が表されている。

このような意味の複合名詞「生ー」は、「生の演奏」「生の放送」「生の講義」というように、「生のー」との言い換えが可能と思われる。また、この場合の「生ー」にも、特に感情・評価的な意味は伴わない。

### 7.2.3 話者の期待からの逸脱

しかし、「生ー」には、その他に「生の」には見られない意味があることも観察される。それは、「完全性」「直接性」などの面において、話者の「予測通り」でない、「望ましくない」事態を表すものである。

そこには、「本来、間に何かがあるものなのに、直接になっている」のように、直接性について話者の「予測と反対」で、「望ましくない」事態を表す場合と、「本来予測される完全なレベルに、十分に達していない」というように、その完全性について「予測されるレベル」に達しておらず、「望ましくない」事態を表す場合とがある。

後者は、第4節および第5節で見た理想化認知モデルの観点から言えば、「予測性」からの逸脱において、程度性・段階性が関わってくるものである。

「生ー」がこの意味を表す場合、複合名詞「生ー」は、名詞句「生のー」にそのまま言い換えることはできない。また、事態が話者の予測通りの完全なレベルに達しておらず、望ましくないものである場合には、「中途半端である」「中途半端で気持ちが悪い」などの否定的な感情・評価の意味が生じることになる<sup>20</sup>。

---

という本来リダグダントな表現もされることがある。

<sup>20</sup> 森田（1989:866）に、「物事が完全の域に達しておらず中途半端な状態」「不完全でよくない

(33) シャツが生乾きだ。

(34) 生かじりの知識では困る。

例(33)の「生乾き」は、洗ったシャツがよく乾いておらず、気持ちが悪い状態であることを表す。事態は話者の予測する完全なレベルには到っておらず、中途半端な望ましくないものとなっている。(34)の「生かじり」も、知識が完全に身につけておらず、中途半端な望ましくないものとなっていることを表す。

(35) のらりくらりと生返事でかわしている。

(36) 生傷がたえない。

例(35)の「生返事」も、話者の期待するようなしっかりした答えがなされていないことを表す。返事をするにはしているのだが、中途半端な返事である。

(36)の「生傷」は、傷が癒える過程を、身体の治癒力による一種の「加工・変化」であると考えれば、7.2.1 節で見た「非加工性」を表すものとも分析できる。一方、傷は、生じれば必ず自然に治癒されていくものであるが、その間もなく、次々に新しい傷ができていくということであれば、話者の予測する完全な治癒のレベルに「十分に達していない」との解釈も可能である。

上記の例では、いずれも「予測される完全なレベルに十分に達していない」というように、「予測性」からの逸脱において、程度性・段階性が関わっている。

また、これらの「中途半端である」という点に特に焦点が置かれると、以下の(37)(38)のような表現となる。この場合の「生-」は、“形式的に何らかの意味を添えている”という観点からは、接頭辞化しているものとも考えられる<sup>21</sup>。

(37) 生暖かい風が吹いてくる。

(38) それは決して生やさしい仕事ではない。

---

というマイナス評価の状態」という指摘がなされている。そこに挙げられている例に「生のー」は含まれていないが、これが複合語「生ー」に特徴的に観察される意味であるとの指摘はない。

<sup>21</sup> 森田(1989:866)は、「なま暖かい」「なまっ白い」の例を挙げ、このような「生-」は、「ほとんど気づかぬくらいの状態にある」「ほんのわずかその状態を帯びた段階にある」ことを表すとしている。

例(37)は、完全に「暖かい」とは言い切れない、中途半端な気持ちの悪い暖かさの風を表す。(38)は中途半端に「やさしい」と言えるようなレベルのものではないこと、即ちその仕事が難しいものであることを表す。

また、以下の例(39)は、程度性・段階性は特になく、「本来、間に何かがあるものなのに、直接にむき出しになっている」のように、直接性について話者の「予測と反対」であることを表す例である。

(39) ミニスカートに生足では、見ている方が寒くなってくる<sup>22</sup>。

この場合も、靴下やタイツをはくことを身体に対する一種の「加工」ととらえれば、7.2.1 節で見た「非加工性」を表す例とも解釈できる。一方、靴下やタイツなどをはくのが通常であるのに、それに反して何もはいていないということであれば、話者の予測と反対であることを表す。この場合には、本来のあり方と異なり、露出されていて「望ましくない」という意味合いも伴ってくる。

## 8 まとめ

本稿では、現代日本語の種々の形式に観察される感情・評価的意味の中から、事態の「予測性」および「望ましさ」との関わりを持つ意味に着目し、事態に対する話者の期待と、感情・評価的意味との関連について考察した。

いくつかの生産的・機能的な形式において、話者の事態に対する「予測通りでない」あるいは「望ましくない」というとらえ方が観察され、またそこに何らかの感情・評価的意味が生じていることは、事態のあり方に関する、以下のような理想化認知モデルを仮定することによって矛盾なく理解可能なものとなる。

(40) 事態のあり方に関する理想化認知モデル：(= (12)を再掲)

- a. 事態は、通常、話者の予測通りに進行・展開する。
- b. 事態は、望ましい内容のものであることが、好まれる。

また、事態が「予測通りのレベルに達していない」場合について、新たなケース

---

<sup>22</sup> 「生足」(なまあし)(あるいは「生脚・生あし」)は比較的新しい俗語で、ストッキングやタイツなどをはいていない脚を意味する。「? 生の足(脚・あし)」と言い換えることはできない。

スタディとして「生」（なま）を前項として持つ複合語「生ー」を取り上げ、名詞による修飾の形をとる「生のー」との比較を行いながら、その意味を分析した。

名詞句「生のー」には、「非加工性・直接性」という意味が観察され、感情・評価的な意味は特にない。複合語の前項「生」も、「非加工性」および「臨場性」の意味を表す場合は、感情・評価的な意味は特に見られない。

しかし、「生ー」には、「生のー」には見られない、話者の期待からの逸脱を表す用法がある。「完全性」の面で、話者の「予測通り」でない「望ましくない」事態を表す場合には、「予測される完全なレベルに、十分に達していない」というように程度性・段階性が関わってくる。また、そこには「中途半端である」という否定的な感情・評価の意味が生じる。また、「直接性」の面で話者の「予測通り」でないことを表す用法もあり、その場合にも、「望ましくない」という感情・評価の意味が伴うと思われる。

## 引用文献

河上誓作編著（1996）『認知言語学の基礎』 研究社

鈴木智美（1998）「『ーてしまう』の意味」『日本語教育』97号 日本語教育学会  
pp. 48-59

鈴木智美（2004）「『ーだのーだの』の意味」『日本語教育』121号 日本語教育学会  
pp. 66-75

鈴木智美（2006）「『そんなX...』文に見られる感情・評価の意味—話者がとらえる事態の価値・意味と非予測性—」日本語文法学会『日本語文法』6巻1号 くろしお出版 pp. 88-105

鈴木智美（2007）「現代日本語における接辞『めく』の意味・用法」『東京外国語大学論集』75号 pp. 271-282

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』 角川書店

Lakoff, George 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論—言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店 1993年)



# The Relationship between Speaker's Expectations, Emotional and Evaluative Meanings

- From the Viewpoint of Idealized Cognitive Model -

SUZUKI, Tomomi

This paper investigates the relationship between the speaker's expectation towards a situation and the emotional or evaluative meanings observed in sentences using forms such as the auxiliary verb “*shimau*”, enumerative particle “*dano dano*”, demonstrative adjective “*sonna*”, and the suffix “*-meku*”, as in the following sentences.

- (1) Yuujin no kekkon-shikijo de sono hi no supiichi wo tanomarete *shimatta*.
- (2) Yubikitasu *dano* autosooshingu *dano*, atarashii katakana-go ga fuete kite iru.
- (3) *Sonna* shoo wo moraeru to omotte inakatta.
- (4) Aratamete watashi kara kaisetsu-*meita* hanashi wo shinakute ii deshoo.

In these sentences we can determine the speaker's subjective view that the situation is not desirable, or that the situation is unexpected.

The question is why functional forms such as those above can be described as expressing the given situations as non-desirable or unexpected, or “marked”. This question can be given answered by positing the hypothesis that reflects one of our underlying “Idealized Cognitive Models”, as shown in (5) below.

- (5) The Idealized Cognitive Model concerning “expectedness” and “desirableness” of situations :
  - a. Situations normally develop as the speaker expects.
  - b. Speakers prefer that situations are desirable.

Situations that do not satisfy the Idealized Cognitive Model above are untypical and marked. Consequently, speakers describe them by using marked linguistic forms. This paper also analyzed the meaning of “*nama*”, a preceding element of compound words, to further support this hypothesis.